

大規模言語モデルによる戯曲の台本における距離の分析に向けて

高橋利孔¹ 新美礼彦²

¹ 公立はこだて未来大学大学院 ² 公立はこだて未来大学
{g3124004, niimi}@fun.ac.jp

概要

物語言説論における距離とは、語りと出来事の関係性を捉えるための基本的な概念であり、ミメーシスとディエゲシスからなる。距離は物語言説論においてそのほかの分析項目に包含される傾向にあり、物語言説論を小説以外の物語を持つ言語メディアへ拡張する上で、理論の整理と分析器が課題である。そこで、本研究では、戯曲台本における距離を、演出層と受容層の2つの層に分割し、GPT-5, GPT-5.1, GPT-5.2を使用し、0から2のラベリングによる距離の分析を行った。結果として、ミメーシス性については一定程度の分析が可能であるが、ディエゲシス性については分析において課題が残ることが明らかとなった。

1 はじめに

ジュネットは [1], 物語内容と物語言説を区別し、語りが物語内容をどのような媒介性をもって提示するかを分析した。近年では、LLMを用いた物語言説分析を行う研究も試みられている [2, 3].

その中で提示される「距離」の概念は、出来事がどの程度直接的に示されているか（ミメーシス性）、あるいは語りとして提示されているか（ディエゲシス性）という、語りの様式に関わる指標である。先行研究 [4] では、小説における距離についてLLMを用いつつ人手評価により求めている。

ジュネットの枠組みにおける距離は、主として小説などの物語を対象としており、読者が物語世界にどの程度直接的に接しているかを測る概念として機能している。ミメーシス性が高い場合、出来事は台詞や行為の再現を通じて示され、読者はそれを直接的な出来事として受け取る。そのため、ミメーシス性の最たる事例として、劇作における模倣を提示している。一方、ディエゲシス性が高い場合、出

来事は要約、説明、評価といった語りを通じて提示され、読者は出来事そのものよりも語りの媒介を強く意識することになる。しかし、人間の物語理解では、劇や戯曲においても、説明的に働く演技はディエゲシスであると理解できる。したがって、メディアに合わせた距離の分析を行う必要がある。

しかし、この距離概念を戯曲の台本にそのまま適用することには困難である。戯曲台本は、最終的な受け手である観客に直接提示されるテキストではなく、俳優・演出家・舞台技術者による上演を前提とした中間的なテキストであるからである。戯曲において、観客が接するのは台本そのものではなく、台本をもとに構成された舞台上の出来事である。この点において、戯曲台本は物語論で想定されてきた「語り手―読者」という一層構造ではなく、少なくとも「語り手―演者―読者」という二段階の媒介過程を含んでいると考えられる。

本研究では、この構造的差異に着目し、ジュネットにおける距離概念を再定義した上で、戯曲台本分析へと拡張する。ジュネットの物語言説論における距離概念を、戯曲台本という表現形式に適合するよう再定義し、演出層と受容層という二層構造のもとでミメーシス性とディエゲシス性を捉える。本研究における距離とは、台本の言語表現が舞台上の行為や状況として成立するまでに、どの程度の解釈、翻訳、補完を必要とするか、成立した行為や状況を行動として受容するか、語りとして受容するかを分析する概念である。すなわち、距離は読者や観客の主観的体験を直接測るものではなく、テキストが出来事として成立するまでのメディアの変遷を記述するための指標である。演出層と受容層は排他的な二分法ではなく、同一の台本表現において異なる層で異なる強度を持ちうる連続的な性質である。この二層距離モデルに基づき、戯曲台本中のテキストを定量的に評価するための指標と分析方法を提案する。

2 提案手法

2.1 本研究における距離の再定義

本研究では距離を二つの層に分けて捉える。第一は、台本をもとに上演を生成する側に関わる層であり、これを演出層と定義する。演出層においては、台詞やト書きが俳優の発話や身体行為、舞台空間や時間構成として成立するために、どのような解釈や具体化が必要かが問題となる。発話としてそのまま実行可能な表現は演出層においてミメシス性が高い。一方、心理状態の説明、不在の出来事や人物の叙述、象徴的な情景記述、あるいは演出に関する指示は、舞台行為や舞台設定へ変換するための解釈を要し、演出層において高いディエゲシス性を持つ。ただし、不在の出来事が語られている場合であっても、俳優がそれを実際に起きたものとして内部的に再構成し、身体や声に反映させる必要があるときには、演出層においてミメシス性が同時に高くなりうる。

第二は、舞台上に提示されたものを体験・理解する観客に関わる層であり、これを受容層と定義する。受容層においては、観客が提示された内容を「いま、ここで起きている出来事」として直接知覚・体験する場合、ミメシス性が高い。これには、舞台上で実際に見える動作、聞こえる音、空間の変化などが含まれる。一方、観客が内容を物語の背景、状況説明、意味づけされた情景として理解し、出来事というよりも語りとして処理する場合、受容層におけるディエゲシス性は高くなる。静的な情景描写や過去の出来事への参照表現は、受容層において語的理解を促す典型的な要素である。

この2つの層における距離をそれぞれ求めることで、戯曲台本としての距離を求める。

2.2 実験設定

2.2.1 使用データとアノテーション

青空文庫にて公開されている芥川龍之介によって書かれた戯曲の台本のうち、新字新仮名で書かれている「浅草公園 或シナリオ」、「青年と死」、「二人小町」、「三つの宝」の4作品を対象とした。4作品から493行が得られ、そのうちの50行をランダムに抽出し分析対象とした。その後、それぞれに対して、演出層ミメシス、演出層ディエゲシス、受

表1 データの分布

	0	1	2
演出層ミメシス	2	7	41
演出層ディエゲシス	3	19	28
受容層ミメシス	1	8	41
受容層ディエゲシス	22	16	12

表2 3つのモデルにおける正解率と平均二乗誤差

	GPT-5	GPT-5.1	GPT-5.2
正解率	0.640	0.615	0.660
MSE	0.435	0.505	0.505

容層ミメシス、受容層ディエゲシスについて、0から2までをそれぞれアノテーションを行った。アノテーションによって割り振られたラベルを1に示す。

2.2.2 実験に用いた大規模言語モデル

実験には、gpt-5-2025-08-07 (GPT-5)、gpt-5.1-2025-11-13 (GPT-5.1)、gpt-5.2-2025-12-11 (GPT-5.2)を用いた。分析は、演出層ミメシス、演出層ディエゲシス、受容層ミメシス、受容層ディエゲシスについて、0から2までで評価するようにタスクを与え、距離の分析を行った。

3 結果

表2に各モデルでの正解率と平均二乗誤差を示す。また、表3にGPT-5、表4にGPT-5.1、表5にGPT-5.2における各4項目での詳細な正解率と平均二乗誤差を示す。

4 考察

本研究の結果から、大規模言語モデルは戯曲台本における距離のうち、ミメシス性については比較的安定して推定できる一方で、ディエゲシス性の推定には課題が残ることが明らかになった。

まず、演出層・受容層のいずれにおいてもミメシス性の正解率が高い点は、LLMが台詞や具体的な行為表現を「実行可能な出来事」として捉える能力を有していることを示唆している。特に演出層ミメシスおよび受容層ミメシスでは、全モデルで0.76以上の正解率が得られており、台本中の直接的な発話や舞台上で可視化されやすい行為表現については、自動分析が一定程度可能であると考えられる。

一方で、ディエゲシス性については、演出層・受容層ともに正解率が低く、平均二乗誤差も高い傾

表3 GPT-5の各観点ごとの正解率と平均二乗誤差

	正解率	MSE
演出層ミメーシス	0.820	0.300
演出層ディエゲース	0.420	0.640
受容層ミメーシス	0.800	0.260
受容層ディエゲース	0.520	0.540

表4 GPT-5.1の各観点ごとの正解率と平均二乗誤差

	正解率	MSE
演出層ミメーシス	0.800	0.320
演出層ディエゲース	0.580	0.660
受容層ミメーシス	0.760	0.300
受容層ディエゲース	0.320	0.740

向が確認された。この要因として、第一にディエゲースが本質的に解釈依存性の高い概念であることが挙げられる。心理状態の説明や象徴的表現、不在の出来事の言及は、舞台化や観客理解の過程において複数の解釈可能性を持つため、単一行テキストから一意に距離を推定することが困難である。

第二に、本研究で採用したラベリングが行単位で行われている点も影響していると考えられる。戯曲におけるディエゲース性は、前後の文脈や舞台全体の構造との関係によって顕在化する場合が多く、単独の行のみを入力とした場合、LLMが十分な物語的背景を把握できない可能性がある。これは、特に受容層ディエゲースにおいて正解率が低下した要因の一つと考えられる。

また、モデル間の比較では、GPT-5.2が全体正解率において最も高い値を示したものの、ディエゲース性に関する誤差は依然として大きく、モデル性能の向上のみでは本問題が解決されないことが示唆される。これは、本研究で再定義した距離概念が、言語表層だけでなく、上演生成や受容というメディア変換過程を含意しているためであり、純粋なテキスト理解タスクとは異なる難しさを持つためである。

以上より、本研究で提案した二層距離モデルは、戯曲台本に特有の距離の非対称性を記述する枠組みとして有効である一方、ディエゲース性の自動分析には、文脈情報の拡張やマルチモーダル情報（上演映像、演出ノート等）との統合が今後の課題として残されていると言える。

表5 GPT-5.2の各観点ごとの正解率と平均二乗誤差

	正解率	MSE
演出層ミメーシス	0.840	0.320
演出層ディエゲース	0.620	0.660
受容層ミメーシス	0.780	0.300
受容層ディエゲース	0.400	0.740

5 おわりに

本研究は、戯曲台本を物語テキストや指示書ではなく、出来事生成を内包する言語メディアとして捉え直す試みである。ミメーシス性とディエゲース性を二層構造のもとで記述する本枠組みは、自然言語処理として物語言説論において戯曲台本を対象とした、新たな分析視点を提供するものである。

本研究では距離を、台本の言語表現が舞台上の行為や状況として成立するまでに必要とされる解釈・翻訳・補完の度合いとして再定義し、これを演出層と受容層の二層に分けて捉えた。演出層では、台詞やト書きが俳優の演技や舞台構成として成立するために要求される解釈の量を、受容層では、観客が提示された内容を出来事として体験するか、あるいは語りや背景として理解するかを評価した。この二層構造により、同一の台本表現が、上演生成の側では高いディエゲース性を持ちつつ、舞台上では高いミメーシス性として受容されるといった、戯曲特有の距離の非対称性を記述可能となった。

さらに本研究では、この再定義に基づき、演出層ミメーシス、演出層ディエゲース、受容層ミメーシス、受容層ディエゲースの4項目を独立に評価する枠組みを提示し、大規模言語モデルによる戯曲台本の距離分析を試みた。その結果、台本中の発話、情景記述、演出指示といった異なるタイプのテキストに対して、距離の層構造を一定程度自動的に推定できる可能性が示唆された。一方で、ディエゲース性については、すべてのモデルにおいて演出層と受容層の両方で、ミメーシス性と比較して悪い結果となった。

今後の課題としては、第一に、上演映像や演出記録との対応づけを通じて、台本上の距離評価と実際の舞台上での受容との関係を検証することが挙げられる。第二に、アノテーションの多人数化やジャンル・時代の拡張により、距離評価の再現性と汎用性を高める必要がある。

参考文献

- [1] G(著)Genette, 和泉涼一(訳)花輪光(訳). 物語のディスクール. 水声社, 1985.
- [2] Andrew Piper and Sunyam Bagga. Using large language models for understanding narrative discourse. In **Proceedings of the 6th Workshop on Narrative Understanding**, pp. 37–46, Miami, Florida, USA, November 2024. Association for Computational Linguistics.
- [3] 高橋利孔, 谷中瞳, 高村大也. 物語作成支援に向けた大規模言語モデルを用いた小説における言説分析. 人工知能学会全国大会論文集 第 39 回 (2025), pp. 3Win537–3Win537. 人工知能学会, 2025.
- [4] 吉井史夏, 村井源. 物語文章における「描写距離」に影響を与える文体的特徴の分析. デジタル・ヒューマニティーズ, Vol. 4, No. 1, pp. 33–51, 2025.

A 付録

プロンプト 1: タスク指示

戯曲の台本が舞台上で出来事として成立する際の「距離」を分析してください。以下に与えられるテキストは、戯曲台本の一部であり、台詞、ト書き、あるいは舞台指示が1行分記述されます。

この分析における距離とは、ジュネットによる物語言説論における距離を、再定義し戯曲の台本に拡張したものです。本分析における再定義では、距離は台本の言語表現が舞台上の行為や状況として成立するまでに、どの程度の解釈、翻訳、補完を必要とするかを指します。戯曲の台本であるため、距離は単一ではなく、必ず二つの層に分けて考える必要があります。第一は、台本をもとに上演を生成する側、すなわち俳優・演出家・舞台技術者に関わる演出層です。第二は、舞台上に提示されたものを体験・理解する観客に関わる受容層です。

演出層においては、テキストが舞台行為として実行するにあたって、テキストからどのような解釈が必要であるかを評価する。発話としてそのまま実行でき、舞台行為について解釈を必要とする場合、演出層におけるミメシスは高い。一方、心理状態の説明、不在の出来事や人物の叙述、象徴的な情景記述など、舞台設定へ変換するために解釈が必要な場合、演出層におけるディエゲシスは高くなる。ただし、これらの場合でも、俳優がその出来事を実際に起きたものとして内部的に再構成し、身体や声に反映させる必要があるときには、演出層におけるミメシスが高くなりうる。

受容層においては、観客が台本において提示される内容をどのように受け取るかを評価する。観客が内容を「いま、ここで起きている出来事」として直接知覚・体験する場合、受容層におけるミメシスは高い。これには、舞台上で実際に見える動作、聞こえる音、空間の変化などが含まれる。一方、観客が内容を物語の背景、状況説明、意味づけされた情景として理解し、出来事というよりも語りとして処理する場合、受容層におけるディエゲシスは高い。静的な情景描写や、過去の出来事に対する参照表現は、観客に語りの理解を促す要素である。

各層におけるミメシスおよびディエゲシスは、互いに排他的ではなく、同時に高くなることがある。そのため、それぞれを0から3の整数値で評価します。0はその性質がほとんど観測されないことを示し、1は弱く存在すること、2は明確に機能していることを示します。したがって、一つのテキストに対して、演出層ミメシス、演出層ディエゲシス、受容層ミメシス、受容層ディエゲシスの四つについて分析してください。

評価にあたっては、テキストが具体的な行為を指示しているか、翻訳や解釈をどの程度必要とするか、不在の出来事や人物を参照しているか、俳優が内部的に出来事を模倣する必要があるか、観客が直接知覚できる要素があるか、またそれが物語的背景や象徴として理解されやすいかといった点を総合的に考慮してください。

以上を踏まえ、与えられた戯曲台本のテキストについて、演出層ミメシス、演出層ディエゲシス、受容層ミメシス、受容層ディエゲシスの四項目を、それぞれ0から2で評価し、その判断に至った理由を簡潔に説明してください。
